

日本学術会議

# 第1部ニューズレター


第22期 第5号




■巻頭言	第一部長 佐藤 学 ……	1
■第一部主催シンポジウムのご報告	第一部幹事 丸井 浩 ……	2
■福島の間を知るために —浪江町視察の概要—	第一部幹事 後藤 弘子 ……	4
■浪江視察の報告 ……		8
浪江町訪問記	吾郷 眞一	
見えない放射能による分断を超えて	落合恵美子	
浪江町「避難指示解除準備区域」の間	小森田秋夫	



〒106-8555 東京都港区六本木 7-22-34  
日本学術会議 第1部担当  
TEL :03(3403)5706 FAX :03(3403)1640  
E-mail: s251@scj.go.jp  
Web サイト: <http://www.scj.go.jp/>



## 巻頭言




第一部部長 佐藤学

誰一人住んでいない街、草ぼうぼうで柳まで生えだした田畑、ネズミと豚の棲家となった家屋、一羽も鳥を見かけない空、二年半近くも止まってしまった時を告げる時計……。7月14日、第一部の夏季部会の一環として福島県双葉郡浪江町へ現地調査で目の当たりにした「フクシマ」の断片です。この現実から私たちは社会と科学のあり方を問い直すことを活動の柱にしたいと誓いました。仮設住宅の方々との懇談も貴重でした。多くの方々が、もうあそこには戻りたくはないと語られていました。その逆説的な言葉は重く私たちの心に残っています。もう一方、私は被災地の多くの学校を訪問してきましたが、子どもたちは誰もが「ふるさとの未来のために学びたい」と語ります。この三つの現実のはざまに私たちは立っています。


第23期の会員・連携会員の活動も、あと1年間を残すのみとなりました。この1年間で何ができるのか。そのことを日々問い直しています。設定すべき大きな課題は三つ。第一は、東日本大震災復興と福島原発後の社会と科学の問い直しを人文・社会科学の科学者コミュニティの総意として政策提言としてまとめることです。第二は、人文学と社会科学の振興のための現実的で積極的な方策を準備することです。第三は、第22期から第33期への橋渡しとして、公正かつ適切に会員・連携会員の選出を行うことです。

これからの1年間、人文・社会科学の振興については、諸分野を横断する学協会の連帯を築きたいと思いますし、学術・文化のバランスある発展を基礎づける「学術基本法」の可能性について検討したいと思います。会員・連携会員の選考について言えば、第一部は3分の2の会員が入れ替わります。しかも任期を終える会員のほとんどは9年間会員をつとめた方々です。新しい活力を導入しつつ、活動の水準を維持する継承を緻密に進める必要があります。

私自身はこれまで19期、20期、21期、22期と会員を経験してきましたが、この第22期の第一部は、どの期よりも活動力があり議論が活発で、しかも相互に協力的な関係が生まれています。この条件を活かして、あと1年の活動をまっとうしたいと思っています。



## 第一部主催シンポジウムのご報告



第一部幹事 丸井 浩

平成 23 年 10 月から第一部の幹事を拝命し、夏季部会ならびに第一部主催の公開シンポジウムの企画・運営を仰せつかった。今回はその 2 年目にあたる。例年は夏期部会とシンポジウムを同一会場で同時期に行っているが、今夏はそれぞれ別々に開催するというきわめて異例の事態となった。なぜそのようになったかと言え、甚大な原発災害に見舞われ、今なお十分な復旧の見通しが立たない福島の地で、何としても第一部としてシンポジウムを開催したいという念願を実現するためには、財政的に逼迫している日本学術会議の実情に照らして、多くの会員が参加する夏期部会自体は、なるべく旅費の負担がかからない東京で開催し、福島でのシンポジウムは有志中心の参加に切り替え、できれば翌日には自由行動として現地視察を行いたい、という理由があったからである。

結果的に、福島での公開シンポジウムは 7 月 13 日（土）に、そして夏期部会は日本学術会議講堂で 8 月 24 日（土）に開催されることになった。そしてシンポジウムの翌日は有志の参加を募り、浪江町被災地視察が行われた。ここではシンポジウムの報告記事のみを記し、浪江町被災地視察については、後藤幹事のレポートをご覧戴きたい。なお 8 月の夏期部会については、次号のニューズレターでご報告する。

公開シンポジウムのテーマは「3.11 後の科学と社会—福島から考える」、7 月 13 日（土）13 時 30 分から 17 時 30 分、福島市内の福島銀行本店地下会議室で行われた。主催は日本学術会議第一部ならびに第一部福島原発災害後の科学と社会のあり方を問う分科会（島菌進委員長）、共催として福島大学うつくしまふくしま未来支援センター（以下、「未来支援センター」と略す。）、そして（財）日本学術協力財団に加えて、会場をご提供下さった福島銀行に後援して戴いた。

最初に、入戸野修 福島大学学長ならびに大西隆 日本学術会議会長（慶応義塾大学教授）にご挨拶を戴き、続いて第一部「福島で何が問われているか」では、後藤弘子 第一部幹事（千葉大学教授）の司会のもとで、島菌進 第一部会員（福島原発災害後の科学と社会のあり方を問う分科会委員長、上智大学教授）および丹波史記 連携会員（福島大学行政政策学類准教授）から報告がなされた。島菌氏の報告タイトルは「放射線健康影響問題と学者の社会的責任—3.11 後の行動を中心に—」、丹波氏は「東京電

力福島第一原子力発電所事故における避難者の現状と復興に向けた課題」と題する報告を行った。その後、広渡清吾 連携会員（専修大学教授）のコメントが続いた。


続く第二部「福島で何ができるか」では、杉田敦 第一部会員（同上分科会副委員長、法政大学教授）の司会のもとで、船橋晴俊 連携会員（法政大学教授）からは「震災からの再建のための『取組み態勢』のあり方と、『公論形成の場』で取組むべき重要課題」、小山良太 連携会員（福島大学経済経営学類准教授、未来支援センター産業復興支援担当マネージャー）からは「風評被害問題と食品の放射能検査態勢の体系化」と題する報告がそれぞれなされた。第二部のコメンテーターとしては、今井照 福島大学教授（行政政策学類）を迎えた。

最後に、大沢真理 第一部副部長（東京大学）の司会のもとで総合討論が行われた。討論者は、大西隆、小林良彰（日本学術会議副会長、慶應義塾大学教授）、鬼頭秀一（連携会員、東京大学教授）、船橋晴俊および中井勝己（福島大学学長特別補佐、未来支援センター長）の五名。ただし討論に先立って鬼頭氏より、「福島の『被害』、今後の復興に対して、『学』の役割は何か？」と題する問題提起がなされた。

以上、このたびのシンポジウムの外形的な報告のみに終始したことは誠に遺憾ではあるが、各報告、コメントのうち、特に福島大学教員による報告ないしコメントの具体的な内容について、来年に発行される『学術の動向』の特集記事としてまとめる計画である。

土曜日にもかかわらず 200 名近くの参加者を得て、活発な議論が交わされ、まことに意義深いシンポジウムが福島市で開催できたのも、ひとえに山川充夫 第一部会員（前福島大学教授、現帝京大学教授）、そして中井勝己 未来支援センター長、丹波史紀 福島大学准教授、小山亮太 福島大学准教授、今井照 福島大学教授を始めとする福島大学の関係者諸氏、さらには未来支援センターの千明精一様の、きめ細かなご尽力、ご配慮の賜物である。ここに深々の謝意を表します。

なおシンポジウム終了後には、第一部拡大役員会（第 10 回）及び第一部福島原発災害後の科学と社会のあり方を問う分科会（第 8 回）合同会合が行われ、シンポジウムの総括や夏期部会に向けての話し合いなどがなされたことを付言する。



## 福島のいまを知るために一浪江町視察の概要一

第一部幹事 後藤弘子

### (視察前の経緯)

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター（以下センター）のご協力、第1部の懸案であった福島でシンポジウムが行えると決まった時、次にどうすれば「福島いま」を知ることができるか、という課題に直面することになった。もちろん、福島大学で福島の人たちと緊密に共働している人たちが、シンポジウムのパネリストとして、「福島いま」を語ってくれることでも「福島いま」を知ることができる。しかし、それ以上の「なにか」を企画したいと思った。

そのことを、会員で、前センター長の山川充夫先生にご相談したところ、センターの事業コーディネーターの千明精一先生が中心となって企画していただけることになり、二日目の7月14日に念願の現地視察が実現することになった。

私は、所属しているNGOとの関係で、震災直後の4月末に飯舘村、南相馬市を訪ねたことがあった。当時飯舘村は全村避難が決まった段階であったが、誰一人歩いている人がいない村と、春爛漫に咲き誇る草花とのコントラストが放射能の影響が突きつける問題を少しだけ垣間見ることができたことから、区域が再編されたばかりの浪江町に行けるということは、願ってもないことであった。

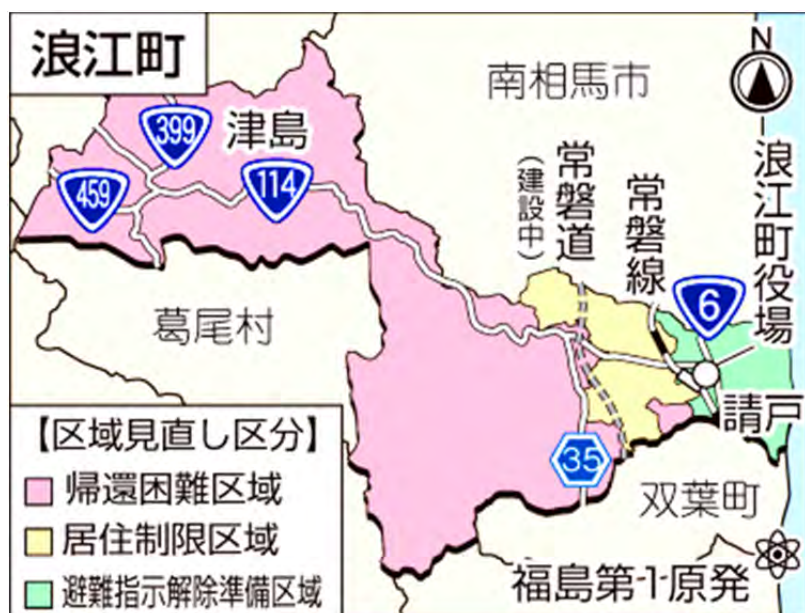
### (浪江町の現状)

今回の視察先である双葉郡浪江町は、電源自治体である双葉町の北に位置し、山側は飯舘村にも隣接している双葉郡の中でもっとも面積が広い自治体である。事故が起こってから、全域が警戒、計画的避難の両区域に指定され、全町民が避難していた浪江町は2013年4月1日に帰還困難、居住制限、避難指示解除準備の3区域に再編された。

- ・避難指示解除準備区域（20ミリシーベルト／年以下、空間線量率が3.8マイクロシーベルト／時以下。早期帰還向け、復旧や除染事業を進めて環境整備）
- ・居住制限区域（20ミリシーベルト／年超 50ミリシーベルト／年以下、空間線量率が3.8マイクロシーベルト／時超 9.5マイクロシーベルト／時以下。立入りは制限されないが不要不急の立入りはなるべく控える）。

・帰還困難区域（50 ミリシーベルト／年超、空間線量率が 9.5 マイクロシーベルト／時超。立入りは制限、一時立入りの際は防護服やマスクを着用、線量計を携行）

浪江町は現在でも、このような分断された状況にあり、立ち入りについても制限があることから、今回の視察は、避難指示解除準備区域に指定された地域において行われた。また、当該地域に入るルートについても、チャーターしたバス会社との関係で、帰還困難区域を通る 114 号線ではなく、福島市から、川俣町、飯舘村、南相馬市を通過して、6 号線から避難指示解除準備区域に入るルートを取らざるを得なかった。視察の最初に行われた福島市仮設住宅でお会いした浪江町から避難者の方から、「ぜひ 114 号線から入ってください」と言われたが、今回は断念せざるを得なかった。



（福島民友より、<http://www.minyu-net.com/osusume/daisinsai/saihen.html>）

（当日の日程）

・仮設住宅訪問

当日は、9時に福島駅を出発し、まず、福島市南矢野目仮設住宅南集会所で浪江町から避難された人たちとお会いした。かなり広い集会所がいっぱいになるぐらいの多くの避難者の方が参加され、21名の視察参加会員（加えて福島大学関係者3名）は、避難者の方たちとひざを突き合わせていろいろなお話を聞くことができた。私は2人の帰還困難区域の方と話すことができたが、お二人とも、自分の代で帰れるとは思っていないが、孫の代に帰ればよいというお話がとても印象的であった。

・浪江町に向かう

福島市から浪江町に向かうためには、114号線を使うルートが一般的であ

るが、浪江町の114号線沿いの多く地域が帰還困難地域に分類されていることから、川俣町、飯舘村、川俣町、南相馬市を通るルートを使って浪江町に入る。途中、車窓からは飯舘村の田畑が雑草によって荒れている状況を多く目にする。去年は、セイタカアワダチ草が、今年はヤナギが田畑を覆っているという。なお、時間の関係で食事は車中でのお弁当となったが、そのお弁当は、飯舘村から避難している女性たちによる「かーちゃんのカプロジェクト」によるもので、とてもおいしく、楽しみながらいただいた (<http://ka-tyan.com/>)。

#### ・浪江町商店街、浪江町役場等の視察

現在、浪江町役場は、一部の機能を除いては二本松市に設置されている。その浪江町役場から、3人の職員の方々（復興推進課）が川俣町「道の駅」にて合流され、職員の方たちの案内で本格的な浪江町視察が開始された。

最初に、6号線に設置されている「知命寺バリケード」通過を通過して、いよいよ浪江町に入る。初めに、浪江町商店街に立ち寄る。地震の影響があり、崩れたままの建物や道路。誰もいない商店街。地震によって割れた歩道から生えた雑草が元気に育っている。時が止まった町に声もでない。

続いて、一部機能を回復した浪江町役場を視察。電気はまだ復旧しておらず、とても大きな自家発電機によって電気をまかなっている。区域が再編され、避難指示解除準備区域となったが、「帰還」の実際のハードルの高さを改めて確認することができた。

#### ・請戸漁港、請戸小学校視察

「高瀬交差点バリケード」を通過して、海岸に向かう。ここのバリケードを越えるためには、特別の許可が必要となる。地震の影響のみならず、津波の被害を受けた海岸には、船がまだ放置されている。がれき等の処理に関しては、最後に残るのが船舶である。ほかのがれきはかなり処理されていたが、船舶が残る風景は、私が南相馬で2012年1月に見た風景を思い起こさせた。

請戸小学校は、他の多くの小学校と同様に当時卒業式の準備の最中であった。津波が押し寄せ、電気が止まったであろう午後3時38分を指したままの時計。床が抜けた講堂にかけられた「卒業式」の文字。子どもたちの持ち物も含めて多くのものが「放置」されている現場は、今福島が置かれている状況を示しているようであった。

#### ・請戸海岸

請戸海岸は、東京電力福島第一原子力発電所から4kmのところまに位置している。請戸海岸から見える発電所は、思ったより小さく、それが与えた影響の大きさを思った時、何とも言えない気持ちになった。海岸を吹く風はあくまでも爽やかだったが、放射能が目に見えないということの意味がとても私と不安に

させた。

・ふれあいセンターなみえ運動公園

避難指示解除準備区域では、除染が本格化している。しかし、ここでも、除染廃棄物をどこに置くのかという問題が生じる。現在は、駅の西側に位置するふれあいセンターなみえの運動公園が除染廃棄物仮置き場となっている。ただ、これから「帰還」がすすんでいったとき、いつまでここを仮置き場として使えるのか、という問題に直面せざるを得ない。

(若干の感想)

2か月以上たった今でも、浪江町の風景は忘れられないものとなっている。これまで私は津波により破壊的な被害をうけた岩手の沿岸部を何回も訪ねたことがあった。その風景と比較して、浪江町や飯舘村の風景は、「人の手が入っていない」という意味で、人工的なにおいのしないものであった。「復興」には、人為が必要となるが、浪江町には、「人為」が届いていない、と感じた。コントロールできないものをコントロールしようとした人間の愚かさが多い人の生活を人生を根こそぎ奪ってしまった。その愚かな人間の一人として、何ができるのか。今もこころがざわついている。







## 浪江視察の報告

### ◇浪江町訪問記

第一部会員 吾郷 眞一

シンポジウムの翌日、福島市内の仮設住宅で1時間程度居住者との意見交換を行い（自分の家に戻ることができたとしても、今までの仕事・生活はできる状況ではないという方々に対して、さらにどういう質問をしたらいいのか、学術会議として私たちに何ができるのかということを手問自答しながら、かなり重い1時間でしたが）、福島大学が用意してくださったバスに乗り浪江町に向かいました。（幸運にも隣座席が福島大学の中井先生でしたので、道中さまざまなことをうかがうことができました。）途中立ち寄った休憩所で浪江の町役場職員の方々3名が合流、説明を適宜していただきながら、いまだ立ち入り禁止地域（帰還困難区域）となっている西側区域を迂回し、北の南相馬市方面から浪江町に入ったのです。小一時間の小旅行でしたが、

その光景は胸が痛むものでした。もし3年前だったら楽しい旅であったであろう晴天の緑深い山間の道を進むとき、稲穂の代わりに雑草や柳が茂る水田（の跡！）、思いついたように行われている除染工事、ほとんど人気がない街道筋を目の当たりにして、いたたまらない思いがこみ上げてきます。

浪江町の中心部に入るところにバリケードがあり、町が契約した保安会社による検問が行われています。「避難指示解除準備区域」になって、昼間は自宅への帰還が許されているとはいえ、住むわけにはいかないところに長居する人も多くはないと見え、検問は外部の無関係な人（はっきり言えばどろぼう）が、空き巣狙いをしに来ることをチェックする意味があります。工事を装ったトラックで侵入し、ごっそりと盗んでいった輩がいたそうです。警察による警戒も福島県警だけでは足りず、他県からの応援を得ているといわれました。確かに新潟ナンバーのパトカーを見ました。

町役場がある中心部は津波の被害にはあっておらず地震の跡だけがちらほら見えますが、人影が全くないと言っていいくらいであるにもかかわらず、その時のままの姿であるので、あたかも家や店から人が出てきそうな錯覚を受けます。周辺部の津波にやられたところに点在する廃屋、ひっくり返った車、ガードレールをまたいだまま放置された漁船のような、よく写真で見る光景とは違った荒廃があります。大昔イタリアでポンペイの遺跡を見学した時に感じた臨場感（その時も、今にも人が出てきそうに感じました）がありましたが、ここはこれから復興しなくてはいけないところ、という意味で別の重苦しさがありました。

立派な町役場には一部職員が常駐し業務を行っていますが、トイレもまだ仮設状態ですし、復興といっても問題山積で、まだまだ仕事はこれからというところに見えました。そもそも、来る前に立ち寄った仮設住宅にいる人たちが一様に言われていたことなのですが、もどったところで、漁業も農業もおそらく昔のようにはできないのです。若い人たちで県内外の避難先に就職口を見つけた人は、子供たちがむしろそちらでの学校環境に慣れてしまい、浪江町に戻ると、また新しい生活を開始しなくてはならなくなるのでおそらく戻っては来ないだろうといわれています。避難した当初は子供たちも昔の学校と仲間が恋しく、早く元に戻りたいと言っていたそうですが、時間がたつと逆になっていきます。原発事故は地域社会と文化を一挙に破壊してしまったのです。（浪江町のホームページ表紙に昔の街の風景や祭りの模様が出ていますが、その光景が復活するのはいつのことでしょうか。）

小学生たちが運動会の練習をしていた最中に時間が止まってしまった（文字通り、校舎にかけてある掛け時計は、地震の時間を示したまま止まっています）請戸港のそばにある小学校を訪れました。当時の校長の決断で在校生すべてが1キロ以上離れた山の中に避難し難を逃れたそうです。建物の一階は完全に津波でやられていますが、二階は何とか残り、教科書や筆記用具

の類がそのまま放置されています。周りの住宅はすべて更地になっています。役場の人に次のような話を聞きました。かろうじて家の一部だけが残った住居に住む老人が、家族と一緒に逃げるのをあきらめ居残ったところ、家族が乗った車は押し寄せる津波に飲まれてしまって、一人だけ生き残ったということがあったそうです。請戸港自体も防波堤を除いて何もありません。南のほうを向くと4キロ先に福島第一原発が不気味に見えています。あれさえなかったならば、いまごろ町は復興の準備を着々と進め、この小学校にもにぎやかな声が戻ってきていたのではないかと思うと、またやるせなくなります。浪江町を去る前に、この荒野の中にある仮の慰霊所に立ち寄りしました。私たちがバスを降りてお祈りをしていると、おそらく住民と思われる方たちが2組ほど来られました。案内をしてくださった役場の人たちは、ばつの悪そうな感じです。被害者にとっては、外者が何をしに来たのだという気持ちであることを役場の人たちが一番よく知っているからです。

福島市に戻る途中降り出した雨も市街地に入る直前の峠を越えるとやみ、市の向こう側に会津山系が夕日に映えてきれいに見えます。この美しい自然と文化を一瞬にして破壊してしまった天災と人災、科学者である私たちには、これに対峙する重い責任があることを再確認した訪問でした。

#### ◇見えない放射能による分断を超えて

第一部会員 落合 恵美子

浪江町で目にしたのは、生い茂る雑草に覆われた幾艘もの漁船、ひしゃげて、あるいは逆さまになったまま放置された無数の自動車、一階部分のごっそりさらわれて空洞になった民家など、震災から2年数か月が経過したとは思えない生々しい光景だった。昼間だけ立ち入りが許可されるようになったものの、これらすべてを片付けることは到底できない。商店街を歩くと、床に散らばった商品も、割れた窓ガラスもそのまま。請戸小学校の教室の時計は、どれも3時38分を指して止まっていた。津波の被害を受けた他の地域が少しずつでも復興への足取りを進めているのとは対照的に、目に見えない放射能がこの地区の時間を止めてしまった。

目に見えない放射能は、人の心にも深く浸み込んでいることが次第にわかってきた。福島市の仮設住宅に暮らす浪江町の方々にお話をうかがった。当分のあいだ家に戻れないのはわかるが、住み慣れた地区に少しでも近い地区に移りたいというおじいさんと、このまま福島市に住みたいおばあさん、子どもを福島市の高校に行かせたいお母さんの考えが合わないという。放射能の影響についての判断、他の条件についての判断はひとによって異なるため、どこに住む

か、これからどのように生きてゆくかについての考えも分かれる。身近などうしの間でも、容易には譲れない。

実はわたしは、この福島訪問の後、京都に子連れで避難して来られているお母さんに、そのご経験やお考えを学生たちにお話しいただくことを予定していた。夏季の国際交流の催しで、台湾大学とソウル大学の学生を京都大学に招く折に、京都で考える **Fukushima** というセッションをもちたいと考えたのだ。しかしこの企画について福島の方にお話しすると、予期していなかった強い危惧の念を示された。遠く京都まで避難する選択をされた方たちにはそれなりのお考えがある。それを学生たちにお話しいただくのはもちろん意味のあることではあるけれど、福島に留まることを選択された方たちの意見もうかがわなければ、バランスを失する。ぜひ3大学の学生を連れて福島を再訪してほしい、とおっしゃるのである。

放射能の影響、特に低線量被爆の長期的影響についてはわからないことが多いため、不確実性のもとで人々は選択を迫られる。逆にある選択をしたことにより、それに適合的な根拠を求めざるをえないこともあろう。「絆」が強調されるのとは裏腹に、放射能は見えないがゆえに、被災者を何重にも分断して苦しめている。

しかし、それを乗り越えようとする努力も重ねられている。避難したお母さんたちと、福島に残ったお母さんたちとが、一緒に悩みを語り合う機会が意識的に作られている。話せば悩みの根は同じで、通じ合うことが多いという。

結局、京都での企画は、東京から避難していらしたお母さんと、生体には免疫力があるので低線量被爆の影響は大きくない、地元の野菜を安心して食べて福島で子どもを育てたらよい、と説く医師との、かなり異なる意見を3大学の学生たちに聞いてもらい、自分たちで考えてもらうセッションにした。福島からの避難者のお母さんたちも参加して発言して下さった。原発が政治的争点となっている台湾と韓国の学生たちのこの問題への関心と知識は非常に高く、鋭い質問が相次いだ。

福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの研究者たちと訪れた屋台村では、食の安全を確保するために福島でどのような検査がなされているか、魚の生態と放射能汚染の関係などがいかに研究されているかを教えていただいた。危険の過小評価も過大評価も避け、現実的な判断を積み重ねてゆく大切さをあらためて思った。

◇浪江町「避難指示解除準備区域」のいま

第一部会員 小森田 秋夫

日本学術会議第一部（人文・社会科学）による福島県浪江町被災地の視察に参

加した。

浪江町は、福島第一原発から北西に広がる、あの細長い放射能高濃度汚染地域に丸ごと包み込まれている。4月1日に実施された区域再編の結果、大部分を占める「帰宅困難区域」（年間積算線量が50ミリシーベルトを超えるおそれがある区域）、「居住制限区域」（20ミリシーベルトを超えるおそれがある区域）、「避難指示解除準備区域」（20ミリシーベルトを下回るとされる区域）に3分割された。「避難指示解除準備区域」は海岸側のごく狭い区域で、除染など公益を目的とした立ち入りのほか、自宅などの片づけ・補修などのための住民の一時帰宅が認められるが、宿泊することはできない。立ち入りのための許可は必要なくなったものの、防犯上の理由から、町では何か所かにバリケードを設け、証明書がない場合は記帳したうえで入れる、という措置をとっている。今回訪れたのは、この地域である。われわれのバスは、浪江町の「帰宅困難区域」「居住制限区域」を迂回して、北隣の南相馬市から町に入った。

浪江町職員の方々が説明用に配布してくださった資料の冒頭には、次のように書かれている。

#### 復興への道のりでの最大の課題

- ・「分断」、「対立」に陥りやすい思考
- ・「共感」「想いを寄せる」ことができない感受性
- ・「比較」することで、自ら招く分断
- ・不安から確固とした「正しさ」を求める心
- ・「力を寄せ合うべき者同士」が対立し、傷つけあう  
→こういったことの意識・克服が必要

自治体の文書らしからぬこのような言葉に感銘を受けるとともに、この町が抱えている問題の複雑さ、困難さを、私は印象づけられた。その背景には、次のような事情がある。

波江町の住民 **21,149** 人のうち、約3分の2の **14,614** 人は福島市・二本松市・いわき市をはじめとする県内各地域に、約3分の1の **6,535** 人は東京都を筆頭に全国のほとんどすべての都道府県に散らばって避難している。浪江町は3回にわたって住民意向調査を実施しているが、この3月に発表された報告書によれば、「避難指示解除後すぐに浪江町に帰りたい」「条件が整えば帰りたい」「自宅に帰れるのであれば、解除後すぐ帰りたい」「自宅に帰れるのであれば、条件が整いさえすれば帰りたい」を合わせて **22.3%**、「しばらく二地域居住（町とその他の地域との行き来）を考えている」が **16.9%**、「まだ判断がつかない」が **29.4%**、「浪江町には戻らないと決めている」が **27.6%**となっている。「戻らないと決めている」理由は多岐にわたるが、放射線量に対する不安、原発の安全性に対する不安、家が汚損・劣化し住める状態ではない、というのが上位を占

めている。町に戻るかどうかの判断に影響を及ぼす要因は多様であり、年齢やある程度は性別によっても異なる。したがって、家族中で意見が違うこともあるに違いない。というわけで、復興への町の基本的な構えは、町に戻る条件を整える努力を行なう一方、町の外にあってもコミュニティとしての一体性を最大限確保する、このような二重の戦略をつうじて、〈多様性〉を尊重し〈選択肢〉を保障する、ということに置かれている。前述の言葉は、そのような方針を実際に貫くことの困難さを物語っているのである。

視察の印象をひと言でいえば、理不尽、である。

津波に襲われた海岸の請戸地区を見た。大小の漁船があちこちで無残な残骸を晒している。建物の跡形もなくなった空間に請戸小学校の大きな校舎が生き残っている。が、一步中に入ると、ここで学んだ子どもたちにはとても見せられないような津波の爪痕がほとんどそのまま残っている。震災から半年後の**2011**年8月に訪れた陸前高田の風景を思い起こさせる。しかし、これだけなら、理不尽という言葉は出てこない。

2年前の陸前高田と違うのは、津波に襲われた土地が伸び放題の草で覆われていることである。時は経ったが、放射能汚染のため、ほとんど手つかずのままに放置しておかざるをえなかったからである。市街地では、地震で倒壊した家屋、倒れたままの塀、商品の散乱した店、時がたつに連れて劣化してゆく建物...の数々を見た。しかし、一見無傷に見える家でも、福島市内の仮設住宅で女性たちが語ってくれたように、ネズミの侵入を受けたり雨漏りがしたりで、すぐには住める状態にはないのだという。ここでも事情は同じ、時が止まっていたのである。

3月12日の朝、先の見とおしの明らかでないままに、現金程度の持ち物で慌ただしく町を後にさせられたのち、いくつかの避難先を転々とした末に、仮設住宅にひとまず落ち着いた。この人々も、次にはやがて建設されるべき復興住宅に移るといふ漠然とした見とおしはもっているものの、それがいつになるのかをはっきり言うことはできない。浪江町への帰還についてはなおさらである。「避難指示解除準備区域」となり、自宅などの片づけ、補修などのための一時帰宅が認められているはずであるが、日曜にもかかわらず、そのような気配を感じることはほとんどできなかった。

福島第一原発事故がもたらしているこのような状況—これを理不尽と言うほかには言葉が見当たらない。

(付記：小文は、筆者のホームページに**7月14**日に掲載した文章の再録である。<http://ruseel.world.coocan.jp/blog.htm>)

◇編集後記◇

遅くなりましたが、7月の福島でのシンポジウム、浪江町視察に関するニューズレターをお送ります。それぞれの参加者がいろいろな感想を抱いた今回の福島での会合。少しでも多くの方と情報や感想を共有できればと思ってニューズレターを発行しました。

何も始まっていない福島の復興に関して、日本学術会議の役割を引き続き一緒に考えていければと思います。

(第一部幹事 後藤 弘子)